

5. 脳炎の脳スキャン所見

前田 敏男 森 厚文
久田 欣一
(金大・核)

最近経験した3例の脳炎患者の脳スキャン所見を報告する。最初の2例は小児で3例目は大人である。

第1例は、RIアンギオグラムは正常。早期スキャンも正常。2時間後に撮像した脳スキャンは両側大脑半球内の放射能がび漫性に上昇しており、頭蓋輪隔や静脈洞も区別できない程であった。これは diffuse encephalitis の所見と一致する。なお本例では CTスキャン、CAG等の所見は正常であった。脳炎の起因ウイルスは不明であったが経過は良く退院した。

第2例は、RIアンギオグラムで片側の perfusion 増加を示した。早期スキャンは正常。2時間後のスキャンは、RIアンギオグラム perfusion で増加を示した同側の crescentic pattern と側面像で側頭部に不整形の淡い異常集積を示した。これは限局性脳炎の所見と一致する。起因は mumps virus と考えられた。経過は非常に良く再検脳スキャンは正常化した。CTスキャンと CAG は正常であった。

第3例は、古い脳炎と思われた症例である。RIアンギオグラムと早期スキャンは正常。2時間後のスキャンは側頭部に淡い不整形異常集積を示し、CTスキャンで同部の atrophy を認めた。RIシスティルノグラフィーでは同部に異常 RI 停滞を示し、脳炎後遺症による脳萎縮と考えた。本症例は症状の改善は認められなかった。

以上より脳炎の初期には CTスキャンや CAG よりも脳スキャンの方が診断的価値があった。

6. Sturge-Weber 症候群の2例

—脳スキャン像と CTスキャン像の比較

斎藤 泰雄 寺島 克賢
河上 幹夫 吉崎 亮
(富山中病・放)
伊藤 茂 坂本 一
(同・小児)
杉山 義昭
(同・脳外)
前田 敏男 瀬戸 光
(金大・核)

2例の Sturge-Weber 症候群の脳スキャン及び CTスキャン像を報告した。

本症候群のスキャン像は、1) 患側大脑半球が小さく、患側の頭蓋輪郭部が拡大する。2) 患側半球のび漫性の RI 集積增加。3) 石灰化部位に一致した異常 RI 集積。4) RIアンギオで病巣部の RI 集積が低下し、血流低下を反映している。以上の所見が文献的報告されており、我々の症例もほぼ一致した所見を呈した。CTスキャン所見としては、1) 脳萎縮(頭蓋左右差、脳室・クモ膜下腔の拡大) 2) superficial cortical calcification 3) superficial contrast enhancement が報告されている。我々の症例(1歳、2ヶ月)は幼児のためか、形態学的变化は著明でなく、contrast enhancement が主な所見であった。contrast enhancement は、血管腫及び毛細血管透過性亢進の両者の関与によると考えられる。

幼児の場合、病態生理学的変化をとらえている脳スキャンの方が、形態学的変化を主に見ている CTスキャンよりも、著しい異常所見を呈するものと考えられる。

7. RI cisternography における脳萎縮所見の検討

仙田 宏平 今枝 孟義
加藤 敏光 浅田 修市
柴山 麟樹 土井 健誉
(岐大・放)

CTスキャンによって脳萎縮を判定された患者

について、脳槽シンチグラフィー所見を検索し、脳槽シンチグラフィーにおける脳萎縮所見を検討した。

CTスキャンでの脳萎縮の判定は、主として、脳溝の拡大、シルビー裂の拡大、脳室の拡大によった。脳槽シンチグラフィーは、腰椎穿刺によって¹⁶⁹Yb- または¹¹¹In-DTPA の0.5~1.5 mCi を注入後3, 6, 24および48時間に正面および左右側面像を撮像し、同時にバックグラウンドと減衰を補正した計数率を計測した。シンチグラフィー所見は、定性的には、正面および両側面像における脳室描画、シルビー槽の拡張像、傍矢状洞脳表の貯留像の有無を検索し、他方、定量的には、RI注入後6時間に対する48時間の計数率比C₄₈/C₆(%)を頭部3面の平均として算出した。対象は、脳槽シンチグラフィーの成功例128例中、1年以内にCTスキャンで脳萎縮を認めた15例で、内12例は42~73歳の高齢者であった。

シンチグラフィーの定性的異常所見として、12例で脳室描画を、13例で両側シルビー槽の拡大像を、また7例で傍矢状洞脳表の貯留像を認め、これら定性的異常所見の検出程度はCTスキャンの脳萎縮所見の検出程度と比較的よく一致した。他方、定量的異常所見として、C₄₈/C₆の高値を認め、その定量的異常所見は定性的異常所見の内のシルビー槽の拡大像と傍矢状洞脳表の貯留像の出現程度と比較的よい相関を示した。

8. RIミエログラフィ

小林 真 乗岡 栄一
小沢ふじ子 小野 栄一
(福井県立病・放)

RIミエログラフィーはRIシステムノグラフィーに比してその診断的役割り、および利用価値についてそれ程の評価は与えられていない感もある。オイルミエログラフィーに比して鮮明さ、詳細さに欠くため、単にRIミエログラフィーは脊髄腔の閉塞の有無等の補助的方法としての価値が認められているのが現状と思われる。しかし最近

肺癌の脊椎転移により下肢マヒを呈した症例を引き続き2例経験し、放射線治療のための照射部位決定のためにRIミエログラフィーが非常に役立ち、またRIミエログラフィーのみで目的を達した経験を得たので報告した。

症例は49歳、男性と19歳男性で前者は腺癌、後者は未分化癌であった。両者ともRIミエログラフィーは腰椎穿刺及び後頭下穿刺により閉塞部位を決定した。RIミエログラフィーの結果より照射部位を決定し、後者は約4,000 rad照射後下肢のマヒは消失して、現在歩行可能であり照射後のRIミエログラフィーにより脳脊髄液の交通を認めた。前者は約6,000 rad照射後知覚は幾分回復したが運動マヒについては回復を認めない。照射後RIミエログラフィーにてはわずかな脳脊髄液の交通を認めた。

放射線治療を目的とした場合におけるRIミエログラフィーの有効性について述べた。

9. PEG法によるT₃-RIAの使用経験

一柳 健次 分校 久志
久田 欣一
(金大・核)

T₃のRIAに関して、PEG法(ポリエチレンリコール法)とDCC法とを比較検討した。検討項目は、インキュベーション時間、温度、血清希釈、再現性、DCC法との相関、各疾患別頻度、各Assayでの正常群の分布等である。検体は、Hyper, Eu, Hypothyroid state pregnancyの67検体で行なった。インキュベーション時間は、Hyperでは反応の飽和が短いため値の変動がなく、Hypoでは、時間に正の相関を認む。温度は、4°C, 23°C, 37°Cで行なったが、4°CでOng/mlにおいて、B/T(%)値が低くなる。

血清希釈は、T₃高値において1/2は信用できるが1/4以上の希釈は信用できない。DCC法との相関は、相関係数0.81、回帰直線はy=0.92x+0.06であった。Hyper, Eu, Hypothyroid StateでのT₃値はそれぞれ、3.68±1.6, 1.46±0.5, 0.79±0.44(means±2 S.D.)であった。これでは、Eu Hyper